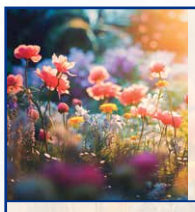
第122号
（創刊：1994年12月15日）

Hirosaki University Hospital Bulletin　弘前大学医学部附属病院広報

南塘（なんとう）だより

発行：弘大病院広報委員会
（委員長：新岡　丈典副病院長）
〒036-8563　弘前市本町５３
TEL：0172-33-5111（代表）
FAX：0172-39-5189
https://hosp.hirosaki-u.ac.jp/
※南塘とは，弘前市史によると医学部敷地内にあった南溜池のことをいう。

2026年（令和8年）10月29日



病院長からの一言
～支えられて、改めて思う本院の責任～



弘前大学医学部
附属病院長　横山　良仁

９月初め，街中で転倒し，顔の骨を骨折しました。急いでいたわけでもなく，普段どおりに歩いていた時のことです。入院，手術，療養に加え，函館での学会開催とシルバーウィークが重なり，９月はほぼ一か月，病院長業務を離れることとなりました。その間，病院運営を支えてくださった皆様に，深く感謝申し上げます。

突然，医療を受ける側となり，診療に携わる方々の確かな技術，看護の温かさ，受診時や療養中の事務職員のさりげない気遣いに，幾度も心を救われました。日頃，病院長として見ている皆様の姿が，患者の立場では，これほど心強く感じられるのか。そのことを身をもって知りました。手厚く支えていただいた日々は，医療の力と，人に支えられるありがたさを胸に刻む時間となりました。

「一寸先は闇」。何気ない日常が一瞬で変わることを経験し，誰もが突然，医療を必要とする側になるのだと実感しました。その時，安心して身を委ねられる病院がある。この安心を地域の皆様に届け続けることが，私たち弘前大学医学部附属病院の責任です。

しかし，その土台となる病院経営は極めて厳しい状況です。物価・人件費の上昇に見合う診療報酬収入を確保することが難しく，2025年度は本院も大学本部の支援なしには収支を均衡できませんでした。2026年度もこの厳しさは続きます。職員の献身に頼るだけでは，この医療を守れません。病床稼働率のさらなる改善と，状態が安定した患者さんの地域医療機関への逆紹介を進め，高度医療を必要とする方を確実に受け入れる体制が必要です。

４月に設置した病院長戦略室を基盤に，月２回程度の戦略会議で経営や運営上の課題を検討しています。各診療科とのヒアリングで現場の課題を把握し，病院の方向性を共有しています。また，７月には病院高度研究支援員として事務職員・技術職員各１名を登用しました。研究関係法令への対応，患者情報の適切な取り扱い，研究公募とのマッチングなどを支え，診療に追われる医師の研究時間の確保と研究力の強化を目指す取り組みです。今日の診療を支える経営と，明日の医療を生む研究。その両方を守るため，支えていただいた感謝を，病院長としての行動でお返ししたいと思います。

各診療科等の紹介　酸素の力で傷んだ組織の修復を支える～高圧酸素治療室のご紹介～

高圧酸素治療（HBO）は，加圧室の中で大気圧より高い圧力のもとで酸素を吸入していただく治療です。血中の酸素分圧が大きく上昇し，酸素が届きにくくなった組織に酸素を行き渡らせられるほか，傷んだ組織の修復や新生血管の形成を促す効果が期待できます。当室では，放射線治療後の組織障害，薬剤関連顎骨壊死，難治性の骨髄炎や皮膚潰瘍，突発性難聴，閉塞性動脈硬化症など，保険適用のある疾患を対象に，各診療科からご紹介いただいた患者さんの治療を担当しています。



2025年度は10名の患者さんにのべ220回の治療を行いました。内訳は歯科口腔外科領域の疾患，すなわち放射線性顎骨壊死や薬剤関連顎骨壊死，術後プレート感染，骨髄炎などが中心で，このほか耳鼻咽喉科，皮膚科，循環器内科の患者さんの治療を担当しました。2026年度も９月30日現在で７名・のべ44回と引き続き多くのご紹介をいただいており，これまでの顎骨壊死に加え，耳鼻咽喉科の突発性難聴，産婦人科の放射線性骨盤内壊死，消化器内科の腸管嚢腫様気腫症など，対象疾患もさらに広がっております。当院の治療選択肢のひとつとして着実に役割を果たしてきています。

HBOは，外科的治療や薬物療法など各診療科の治療と組み合わせて効果を発揮するものであり，治療前には基礎疾患や全身状態を十分に評価し，患者さん一人ひとりに合わせた計画のもとで進めるよう心がけています。

今後も各診療科と密に連携し，安全な加圧室の運用と丁寧な治療の提供に努めてまいります。本治療が有効と考えられる疾患でお困りの患者さんがおられましたら，お気軽に高圧酸素治療室までご相談いただければ幸いです。

（高圧酸素治療室　室長　斎藤淳一）

「がんゲノム医療科」外来診療開始

2026年７月６日より，「がんゲノム医療科」の外来診療を開始しました。当科では，包括的ゲノムプロファイリング検査（CGP検査）を中心に，患者さん一人ひとりの腫瘍に生じている遺伝子変化を調べ，その結果を治療選択につなげる診療を行っています。

CGP検査は，特定のがん種に限らず，すべての悪性腫瘍において治療方針を検討する上で重要な検査の一つです。検査によって得られた遺伝子情報から，現在の標準治療に加えて，遺伝子変化に対応した薬剤や治験・臨床試験など，新たな治療選択肢が見つかる可能性があります。検査結果は，各領域の専門家が参加するエキスパートパネルで多角的に検討し，患者さんの病状や治療歴なども踏まえ，個々の患者さんに適した治療につながるよう努めています。

各診療科におかれましても，CGP検査の適応についてぜひご検討いただき，検査の実施や結果の解釈，治療選択について少しでも疑問がございましたら，いつでも当科へご相談ください。

今後は診療体制をさらに整備し，CGP検査を中心としたがんゲノム医療に加えて，胃癌・大腸癌を中心とした薬物療法にも診療の幅を広げていきたいと考えています。

また，2026年10月１日より，消化器血液免疫内科学講座から星健太郎先生をスタッフに迎え，二人体制となりました。診療体制を充実させるとともに，研究にも積極的に取り組み，診療・研究の両面からがんゲノム医療の発展に貢献してまいります。

がんゲノム医療に関するご相談をいつでもお待ちしております。各診療科と連携し，よりよいがん診療の実現を目指してまいります。今後とも「がんゲノム医療科」をよろしくお願いいたします。


ある日のエキスパートパネルの風景

（がんゲノム医療科長　結城敏志）

病院高度研究支援員（HARA）の新設
―働き方改革時代における臨床研究の推進と研究力強化に向けて―

2026年７月１日，本院では，臨床研究推進センターに新たな専門職として「病院高度研究支援員（Hospital Advanced Research Assistant：HARA）」を新設し，２名の職員を配置しました。

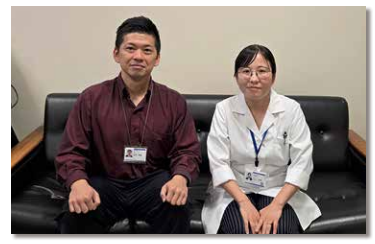
2024年４月に医師の働き方改革が本格的に施行され，大学病院には，診療と教育の質を維持しながら，限られた時間の中で研究活動を持続的に推進することが求められています。こうした状況を踏まえ，本院では「2040年を見据えた弘前大学医学部附属病院改革プラン加速化事業」の一環として，医師免許を持たない専門人材による研究支援体制の強化を図ることとしました。

HARAは，研究者が研究活動に専念できる環境を整えるため，研究に関わる法令・手続きへの対応，研究セキュリティや研究インテグリティの推進，診療情報の研究利用に関する支援などを担います。さらに，競争的研究資金の獲得に向けた公募情報の提供や申請支援，生成AIの活用促進など，研究活動を幅広く支援します。

こうした取り組みを通じて，本学の第４期中期目標の達成にも貢献することが期待されます。同目標は2027年度に最終年度を迎えます。本院では，特定臨床研究等の新規実施件数を年間４件以上とする目標を掲げています。その達成に向けて，研究者への情報提供や研究計画の立案・申請に関する支援を充実させるとともに，最終年度には特定臨床研究関連文書の電子化とクラウド管理への移行を進め，研究者からの問い合わせに迅速に対応できる体制の構築を目指します。HARAには，これらの取り組みを関係部署と連携して支え，研究者の負担軽減と新たな臨床研究の創出に貢献することを期待しています。

今回のHARAの新設は，働き方改革と研究力強化を両立させるための重要な一歩です。２名の専門性とこれまでの経験を活かし，研究者が安心して新たな研究に挑戦できる環境を整えるとともに，質の高い臨床研究を通じて，将来の医療の発展と地域医療への貢献につなげてまいります。院内の皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

（臨床研究推進センター
センター長　新岡丈典）


新たに配置された病院高度研究支援員（HARA）
左：北村　隆雄 氏　右：下山　聡美 氏

先憂後楽

気候変動と医療



呼吸器内科・感染症科
田坂定智

酷暑や大雨など今年は気候変動にまつわるニュースを多く耳にしました。気候変動は疾病構造や医療にも大きな影響を及ぼします。私が専門とする呼吸器内科の領域には夏型過敏性肺炎という疾患があります。トリコスポロンというカビの一種が原因となるアレルギー性の肺炎で，高温多湿な地域で夏場に発生します。1990年代には宮城県が北限とされていましたが，2002年に岩手県で確認され，本院も参加した2023年の全国調査では青森県や北海道でも症例が確認されました。またデング熱を媒介することが知られているヒトスジシマカの生息域は秋田県や岩手県が北限でしたが，近年青森県でも定着が確認されています。国内では2014年に東京でデング熱の流行がありましたが，本州以南のどこでデング熱が発生してもおかしくない状況と言えます。気候変動に伴う疾病構造の変化については，今後も注視していく必要があります。

気候変動は医療提供体制にも影響を及ぼします。国連防災機関（UNDRR）によれば，世界の病院の８％で気候関連の要因による機能停止のリスクがあるとされています。熱波や洪水，豪雪などの災害時には，医療施設の物理的損傷に加え，電力供給の途絶，医薬品サプライチェーンの停滞，医療従事者の被災といった複合的な問題が生じます。医療機関は災害時にも機能を維持するための強靱性（レジリエンス）を備える必要があり，多重的なエネルギー確保など緊急時の対応を事前に計画しておく必要があります。

これから冬を迎えますが，温暖化により大気中の水蒸気量が増えると，数時間で多量に降り積もる「ドカ雪」が起こりやすくなります。昨シーズンは日本海寒帯気団収束帯（JPCZ）の発達に伴う大雪に見舞われましたが，このような事例は地球温暖化に伴って以前より起こりやすくなったとされています。個人レベルで冬に備えつつ，気候変動を医療・社会保障・経済に直結するリスクと捉え，何ができるかを考えていきたいと思います。

【令和８年熊本地震】DMATコーディネーションチーム派遣

2026年７月28日に発生した「令和８年熊本地震」に伴い，厚生労働省DMAT事務局を通じて，青森県からの派遣要請を受け，本院DMATコーディネーションチームは被災地支援のため出動しました。本院からは，伊藤勝博教授，辻口貴清助教をリーダーとするDMATコーディネーションチーム２隊を派遣し，2026年８月９日から13日まで現地で活動しました。伊藤チームにはDMAT補助要員として花田昌吾が参加しました。

伊藤チームは熊本県庁内に設置された熊本県保健医療福祉調整本部の施設支援班のリーダーとして活動し，八代市，宇城市，氷川町の高齢者福祉施設等への支援調整を担当しました。地震の影響により倒壊の危険がある高齢者福祉施設からの入居者避難に際し，県庁の調整本部の一員として後方支援を行いました。また，被災施設の状況や支援ニーズを把握し，飲料水や生活用水などの物資支援，介護士・看護師などの人的支援に関する調整を行いました。

一方，辻口チームは宇城市保健所内に設置された宇城地域保健医療福祉調整現地本部の活動指揮班リーダーとして，DMATをはじめとする医療支援チームの活動調整を担当しました。市内で活動する各チームの活動場所や活動内容を整理するとともに，今後派遣される支援チームの情報や活動予定を集約し，関係機関との情報共有を行いました。


熊本県保健医療福祉調整本部の様子

今回の派遣では，行政機関や福祉施設，全国から派遣された医療支援チームとの連携を通じて，被災地の医療・福祉体制を支えるための調整業務に取り組みました。今回の活動を通じて，多機関が連携して支援にあたることの重要性を改めて実感しました。本院は今後も災害拠点病院として，災害時に迅速な支援を行える体制づくりに努めてまいります。

（総務課　主任　花田昌吾）

【令和８年熊本地震】JRAT派遣

令和８年熊本地震において８月15日～19日に宇城市，９月13日～17日に氷川町でのJRAT活動を行いました。宇城市での支援内容は，全国から集まったJRAT隊の避難所への振り分けや各避難所の問題点把握，関係団体との連絡調整や必要な福祉用具の整理などのロジスティクス業務を中心に行いました。氷川町での支援内容は保健医療福祉調整本部でのロジスティクス活動に加え，避難所での個別支援や福祉用具調整，介助方法の指導など多岐に渡るものでした。氷川町での支援は八戸市立市民病院の理学療法士２名とともに活動を行い，様々な指導をさせて頂きながらの活動となりました。

また，令和８年熊本地震では酷暑下での支援であり，避難者はもちろん支援者の体調管理を行いながらの活動となりました。避難所も決して涼しいとは言えない場所もあり，本県においても今後は酷暑下での避難に関する準備を行う必要性があると感じました。

近年，青森県内でも大規模地震や水害など様々な場所で自然災害が発生しております。そのため，青森県内全体での人材育成が急務となります。令和６年能登半島地震を含めても青森県内でJRAT活動を行った隊員は11名と決して多くはない人数です。今後は，今回の派遣を青森県内に周知し，青森県内の災害リハビリテーション体制の強化を行いたいと思います。


左図：宇城市でのロジスティクス活動
右図：氷川町で活動した青森隊（中央が筆者）

最後になりましたが，今回の派遣に関して多大なる配慮を頂きました横山良仁病院長をはじめ，リハビリテーション部の津田部長，リハビリテーション部スタッフの方々に感謝申し上げます。今後も病院関係者の方にはお世話になることが多いと思いますが，ご支援・ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

（リハビリテーション部　療法士長　西村信哉）

院内コンサートを開催

本院では，６，７，９月に入院患者さんを対象とした院内コンサートを開催しました。

６月には弘前大学医学部管弦楽団サマーコンサートを開催しました。弘前大学医学部管弦楽団は医学を志す学生が中心となり活動している楽団で，忙しい勉強の合間を縫って練習しています。入院患者さんには管弦楽ならではの素晴らしいハーモニーで少し早い夏を感じていただきました。

７月には弘大囃子組による津軽地方各地のお囃子を披露していただきました。会場には笛，太鼓，手振り鉦の音が響き渡り，迫力のある演奏とパフォーマンスでひと足早いお祭り気分を味わっていただきました。

９月にはHIROSAKI MELA VOCE（ヒロサキ メラ ヴォーチェ）の皆さんに合唱を披露していただきました。YELLや365日の紙飛行機などお馴染みの曲の美しいハーモニーが会場に響き，アンコールでは翼をくださいを入院患者さんも一緒に歌っていただきました。


弘前大学医学部管弦楽団サマーコンサート

ご家族と離れて辛い治療に取り組まれている入院患者さんには，コンサートが気分転換となり，治療に取り組む糧にしていただければ幸いです。

（医事課）

2026年度日本肝臓学会東北地区市民公開講座

2026年８月２日（日），弘前文化センターで，「ぜひ知ってほしい肝臓の病気」をテーマに，2026年度日本肝臓学会東北地区市民公開講座を開催しました。

本講座は，肝臓学会の呼びかけで，世界肝炎デー直後の日曜日に全国各地区で一斉に開催されました。本県ではねぶた祭りの時期と重なり，参加者を募る難しさもありましたが，当日は50名以上の方々にご参加いただきました。

今回は，肝臓領域で特に問題となっている脂肪肝とアルコールを主なテーマに取り上げました。吉田健太先生が「お酒と肝臓」，三上恵理先生が「食事で肝臓をいたわりましょう」，私，飯野勢が「脂肪肝で何が問題なの？～脂肪肝がひきおこす病気とは～」について講演を行いました。脂肪肝と全身の健康との関わりや，食事・飲酒習慣を見直す大切さを，身近な話題を交えてお伝えしました。

質問コーナーやクイズも交え，楽しみながら理解を深めていただきました。アンケートでは，回答者全員が今後の生活や健康に役立つと評価し，「食事について考え直そうと思いました」などの感想が寄せられました。県外からの参加者もおられ，肝臓の健康への関心を感じました。

今後も肝疾患診療連携拠点病院として，県民の皆様の肝臓の健康を守る啓発活動に取り組んで参ります。お忙しい時期にもかかわらずご参加くださった皆様と，開催にご協力くださった関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

（肝疾患相談センター長　飯野勢）



青森県感染対策協議会（AICON）市民公開講座を開催

青森県感染対策協議会（AICON）では，感染対策の情報を一般の方に理解してもらう目的で市民公開講座を毎年開催し，今年で第６回を迎えました。

今年は８月22日（土）弘前市民文化交流館ホールにて開催し，テーマは「～クイズで栄養管理・感染対策を学ぼう～」で，①栄養状態と免疫機能の関係を理解する ②感染予防に有効な食事の基本を知る ③日常生活で実践できる栄養管理のポイントを把握する ④日常的な感染対策について理解を深める を目的として行われました。当センターの木村俊幸看護師，栄養管理部の横山麻実栄養士からクイズが出題され，薬剤部の津山博匡薬剤師からレクチャーをしていただきました。参加者にはグループに分かれていただき，グループごとにクイズに答え，正解数を競う形式で行い，和気藹々楽しく盛況な公開講座となりました。

クイズでは意外に迷ってしまう問題もあり，例えば「風邪予防のためにはビタミンCを摂ると良い。○か×か？」「嘔吐・下痢により，食事や水分が摂りづらい時には以下のどれを飲むと良いでしょうか？ ①水 ②麦茶 ③経口補水液 ④スポーツドリンク」

この問題は不正解が多かったです（正解は最後に記載）。

質疑応答では，多くの質問が寄せられ，横山栄養士・津山薬剤師が大変わかりやすくお話しくださいました。

クイズの後には，栄養補助食品の試飲コーナーが設けられ，参加者は色々な味の飲料を試飲し，お気に入りを見つけ，大変好評でした。

今後も定期的な開催を望む意見が多く寄せられ，引き続き市民の皆さまに感染対策の知識や正しい理解を共有していきたいと考えています。

（正解：×。ビタミンCを通常より多めに摂取しても効果がない）
（正解：③。経口補水液は，電解質が体液に近いバランスに調整されており水分を最も効率良く吸収することができる）

（感染制御センター）



2025年度ベストやまびこ賞，Good Approach賞，Good Job賞 表彰式を開催

2025年度ベストやまびこ賞，Good Approach賞，Good Job賞の表彰式を７月28日に執り行いました。

ベストやまびこ賞とは患者さんからの投書のうち感謝の投書が多い部署を表彰するもので，消化器・血液・免疫内科，内分泌・糖尿病代謝内科，第二病棟４階，栄養管理部の４部署が受賞，Good Approach賞とはインシデント報告のうちレベル０の報告が多い部署を表彰するもので，循環器・腎臓内科，手術部，検査部の３部署が受賞しました。

また，Good Job賞では医療行為が行われる前に患者さんとのコミュニケーション等により医療事故を未然に防いだ個人を表彰するもので，入院棟東４階　嶋谷看護師（クリティカルパスにあるワーファリンが処方されていないことを発見し，無投薬を防ぐことができた事例），第二病棟４階　工藤看護師（点滴のセファゾリンのオーダーがある患者さんに，オーグメチンの内服指示が出され，抗生剤が重複となることを発見した事例），第二病棟８階　中田看護師（入院手続き時に渡されたリストバンドを装着する際，患者さんと共に情報確認を実施したところ別患者さんのものであることが判明した事例），手術部（元ICU）　松永看護師（いつもはセファゾリン投与の患者さんが手術後にセフメタゾールNaが指示されていることに気付き，薬剤誤りを防いだ事例），放射線部　櫻庭看護師（MRI検査が終了し，患者さんを迎えに来た看護師が，検査室のドアが開いたときにストレッチャーを入れようとしたため，大きな声で注意し磁気事故を防いだ事例）の５名が受賞しました。


ベストやまびこ賞


Good Approach賞


Good Job賞

受賞された部署及び個人には，横山病院長から表彰状と副賞が贈呈されました。横山病院長からは，患者さんの満足度向上に貢献したこと，医療安全対策に真摯に取り組んでいること，重大な誤りに気づき医療事故を未然に阻止できたことについて感謝の言葉が述べられ，今後も安心，安全な医療の提供を継続してもらいたいと期待のお言葉がありました。（医事課）

弘前大学医学部附属病院へのご寄附，心より御礼申し上げます

お名前の掲載をご承諾いただいた方に限り，ここにご芳名を掲載させていただきます。
今号では，2026年５月から2026年７月末までの間にご入金を確認させていただきました方を公表させていただきます。（管理課）

【さくら基金　寄附者ご芳名】
匿名希望　１名

【診療科等　寄附者ご芳名】
○花田　直之　様　○渡辺　敏雄　様　○和田　一穂　様　○山崎　周蔵　様
○東　武夫　様　○對馬　壽夫　様　○斉藤千加志　様
匿名希望　19名

※掲載の同意をいただいた方以外は，匿名希望とさせていただきました。

【 編集後記 】

南塘だより122号をお届けいたします。

秋風が心地よい季節となりました。我が家のりんご園も赤く色づき，収穫の季節を迎えています。これから収穫作業が本格化し，りんご農家にとって一年で最も慌ただしい時期となります。また，弘前公園では，11年ぶりに元の位置へ戻る弘前城天守の「曳き戻し」が佳境を迎え，多くの関心を集めています。長く親しまれてきた弘前のシンボルの姿を楽しみにしている方も多いのではないでしょうか。一方で，県内ではインフルエンザの流行もみられています。手洗いなど基本的な感染対策を心掛け，健やかにお過ごしください。　（病院広報委員会委員　奈良昌晃）